

仲間の論理と革命

君は一体何か 川川 信

ぼくの内にいる赤軍

① 廟のなかから、とつぜん肉光を放つように現われては消え、決して姿をあきらかにすることがなかったゆえに、彼らは私たちにとつて神秘であり、伝説であつた。自分にとつて、それは非現実性ゆえにこそ、かえつて憧憬でもあつた。そして又、うっせきしたおもしろい代償として……

② 一方、ぼくらの身のまわりはさまざまの問題をはらんだ、しかも日常の事ゆえに一そうのがれがたい事件と状況が、ひしひしと取りまいてゐる。しかもそのひとつをくつがえすことさえ、世界を差上げる重さで存任する。それとの即いの気の遠くなるような面だるさ、ながさは、いらだたく、耐えがたい。

③ それゆえに浅間山荘への逃げこみと麓城・人質・警官等の射殺逮捕として、統一赤軍が現実社会へ立ちあらわれてきたときも、まだ周の衣表をまとうものの延長の中で、彼らは戦士であり、勇者であつた。

④ しかしだが廟からひき出されて、真昼の赤裸々な光にそれが照し出されねばならなくなつたとき、ぼくらの心中に飼ひ育てた偶像はムザンなまでにうちくだかれてしまふものだつた。

⑤ 大量私刑の露頭。すでにそのことによつて、現実的にも崩壊目減していつた統一赤軍への幻想と虚像は、昔をたててくずれていつた。

⑥ それは口先だけで暴力を弄びつた幻想を育てるだけの者たちへの、手ひどい現実のしかえしであつた。

⑦ また彼らの武装蜂起戦術に賛成せず、彼らからは非暴力主義その他と貶しめられていたものまで、その者が誠実な現実の活動をしているかぎり、ほとんどは統一赤

軍のハ心情シンパであつた。それゆえ、ぼくらみんなの多くは、リンチ事件に愕然とし、当惑狼狽した。それをどのように理解してよいか。そしてオミ君にどう説明、弁解してよいか。わからないうちに、いかに立場を見失つた。

⑧ それから、自分にとつてあのようなことはありえないと、彼らの行為と自己とを区別することにあり、無縁無関係の立場をつくりだした。最終結論において、殆どのものが、そこへと逃げこんだ。

⑨ だが、自分がかつて心情シンパであつたことまでを、どうやって否定できようか。しかも心情シンパとしての自己と、統一赤軍との関係はまさに、「自分もあの状況におかれたら、彼らと同じことをやりかねない。いやそれかねない」という裏においてのむすびつきであることに気がつくとき、ひと事として済まされない問題である。

⑩ というよりも、ハあの統一赤軍が、つきつけている問題は何か、自己と彼らとのむすびつきのなかにそれをさぐり求めること以外に、彼らとの超えることはできない。そして彼らは、その無残な現実への降服によつて、何をぼくらに提示しているのか……

同志か仲間か

⑪ 去る三月十九・二〇日、岩国市でハ反戦市民運動全国懇談会がひらかれ、全国から百人あまりがあつまつてきた。オ一日は……

⑫ ① 在日米軍基地一横田・三沢・岩国などでのハ反戦G.I.運動・米軍解体運動と、それへの協力。② 横須賀・佐世保をむすぶSOS運動の内部。③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

問題など。そしてオ二日は自由討論のうちで統一赤軍問題が集中して語あわれた。

⑭ これらの問題提起の報告のうちとくに①のそれは、ジャテック累年の活動実力と経歴を基礎においた新しい発展の出発であり、今回開店した「反戦喫茶木ビツト」とともに注目すべき事項である。それにしても、②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



標的を射つ。玉川信明(2)

二百人の畑に七千人

人民公社の理念と現実

尾関 弘

玉川さんが中国に渡られたのは昨年の四月一日である。羽田を飛び立ったのは四月三日で、その日から、香港を経由して鉄道で中国入りする。その二つの一日で、かかちうなり。ききに、遠く近い国である。

玉川さんは、よくある日中友好協会の訪問団に参加されたのだが、「同行メンバーの不愉快さが中国の不愉快さに重なるんだね」とおっしゃる。訪問団の中を玉川さんのグループは自由業者が多く、なかでも物書きである玉川さんと中国語がとける技師の二人が中国側から徹底的にマークされたらしい。そのため取材や疑問に大きなハンディがあったという。それにしても玉川さんの中国訪問者のほとんど全部が、ウソを言っている事をきいて驚いていて、いつの間にか、帰国後の玉川さんの感想であった。北京ではスウェーデンの友好協会の人があったらしいが、彼は批判すべきは批判しており、「友好」と「中国の方」とはちがうとまでおっしゃられた。中国に行くと中国の現状を知ることができ、「石炭」の日本人から得るものはなく、もちろん中国側の準備する観光コースから興味は尽きず、むしろ中国に長く滞留する外人記者とのホテルのロビーでの雑談に真実があったように思われる。

大きな政治力

尾関 結局、中国での改革というものは、社会単位としては封建時代のそれをそのまま受け継いでいるが、その中での封建的生産関係が変えられた。政治的社長主義がむしろ生産関係の変化に対して後手にまわったんではないかと思うんです。いや、そうはさういっていいけれども、へ政治的社長主義化へと生産関係の変化へが、すくなくとも他の例にみられないほど統一的に達成されていったのではないだろうかと思えます。その意味で中国革命は、とくにその一貫としての文化革命は社会革命的要素が多く、下から創られていった革命という印象が強くあるんですが。

玉川 ときで言うのは疑問です。中国では、昔から「水」を治めるものは国を治める」と言われてきているが、水路工事は大変なことです。そうすると、そのためには大きな政治力をもって、何万の

人を動員して共同作業することが人民のために必要。だから一億何万人の人間が動いていけるような、それを統制する大きな政治力があるんだ。国家が、それにみあうだけの大きな政治力なしに社会主義化できるはずがありません。

中国の伝統

玉川 中国を考えるのに基本的な問題がいくつか考えられます。一番大きな問題は、その巨大な領土です。地域差が大きく、いかに強大な中央権力でもその早てを統治できなかったという自然的、地理的条件です。それから思想的伝統。中国の教義は儒一仏一道と言われているが、それは官吏になるような層の人間の道で、農村部では大半が道教といえる。それも道家へ老荘の思想とはちがう、もっと土着的でオリジナルな道教なんだ。それは孔孟的な道徳の思想とは縁遠いものだ。老子の「小国進民」(国家は小さく、民は進め)という考えがなんかに非常にアナキズム的だと思う。それに人口の多さ、人種の多さ(約五〇種)の問題もある。

秦の始皇帝がはじめて封建制度を官僚制度に変えたんだが、その官僚制が今度は中国の伝統として根付いてしまったんだよね。たとえば官僚になるには莫大な金が要するというふうに。今度の文革でこの官僚制が崩されたというけれど、ちよっとやそこらで崩しきれものではないと思う。

いま中国では「勢兵簡政」ということがしきりに言われています。「簡政」のことも単純なのは「無政」だと思われけれど、アブキストの言う「無政」とは違ふんだよね。「勢兵」ということが、ちゃんと頭についているんだ。

尾関 それじゃあるで、もっともタチの悪い軍事国家じゃないですか。玉川 そうなんだよ。簡政は勢兵によって保たれる。政治機構を簡略化すればするほど大きな軍事的権力機構がいるという矛盾をかかえているんだ。

工農結合・城郷結合

玉川 中国ではへ相互性が一番

大事な問題だと考えられています。人間がその全体性を回復するために、たんなる社会的分業体制だけではだめで、そこで導入されたのが共同体制へ人民公社なんですよ。

「五、七声明を成功させる」というスローガンをめづるところでみました。「五」は軍事を、軍人ならは文芸を農作を」と言う。て、とり早く言えば、何でもできる人間になりなさいということなんだね。たしかに専門職が固定化することによって権力化をはじめるからね。一つのポジションが誰にでも交番できるように……というのが理想なんだ。

注 五七声明一九六六年五月七日のもう東路指示のことで、労働者は工業を主とするところ、条件のある場合、農業生産と工業生産に両方に関与する。農民は農業を主とするところ、条件のあるところでは、農産物の工業生産に関与する。これは、農産物の工業生産と工業の農業生産をなすのに、両方に関与する。流通の無縁をなくし、一地域が自力更生するための経済的基礎である。「工農結合、城郷結合、有利生産、有利生活」へ工業と農業が結合し、都市と農村が結合すれば、生産に有利だし生活に便利である」という言葉五七指示が農民的に表わしている。尾関 大変なことですね、成功すれば、人民公社での管理機能には誰でも参加できるようになっているんです。

玉川 今言っているのは理論だけで、実際は大変なんだよ。七千人の労働者がいる工場に行っただけのことがあるんです。そこにも「五、七声明」が大書してあって、「全員が幹部である」とあるんです。それで食堂に集った時間いてみますと、「ほとんどもない、二百人の畑に七千人では、立っているだけでも一杯さしう」という返事が返ってきた。

尾関 「下放」という制度も、分業をなくすという面では良いものですが考えようによっては恐ろしいですね。一般農民の台所まで兵隊がやってくるということでしょう。

玉川 中央権力があってこそ下まで兵隊が来ないという方が民衆にとっては気象なんですよ。歴史的にも中国では、中央権力が強大だった時は村者共同体の自治は保たれていた。宋、元、スペインのフランコ政権が長く続いているのと似通った面があるように思ふ。

(つづく)

反戦報

反戦報茶基金

○ 三沢で反戦スナック「アウル」が開始されて一年八ヶ月になりました。当時市民運動らしきものがほとんどなかったこの町に乗りこんでいった少数の若者たちは、悪戦苦闘してこの運動体を育ててきました。そして今、新しく岩国にも反戦喫茶「ホビット」が開店しました。しかし反戦喫茶店は、これまでの経験からすると慢性的な財政危機状態にあり、店に住込んで活動する人びとの生活にしろやせされます。運動が少数の市民の財政的負担によって支えられてきたあり方をあらため、さらに運動者の生活を最低限人間のものにするために、私たちは「三沢・岩国反戦喫茶基金」を設け、広く市民の参加を要請することにしました。

金額 毎月一口五百円以上
送金 東京や平連の振替(臨時)
發起人 石崎昭哲、岩谷和夫、観 俊輔、鶴見良行、中川六平、原田竜二、福岡節男、向井孝、吉川勇一(ヒラより)

石神井

ダウンジャツク

新住居を探している友人へ。どうせ住むなら石神井に来ることをすすめる。現在、三つのアジトを確保し、ダウンジャツク、生活からの運動を展開し、石神井のフリータウン化を進めている。我々の運動に賛同・参加するしないにかかわらず、運動を集中させ町ごと牛目ってしまおうではないか。町を牛目する作業、生活からの運動の展開こそ、文化の創造を可能ならしめる物質的精神的母胎を勝ち取る運動なのだ。

連絡先 東京都練馬区石神井町1の6の10 渡寿美子3号 大友

気付く文化叛戦るなっさんす
(口蘇生 5号より)

ウイマン リバ大会

四月三〇日 前夜祭
五月五・七 全体集会、分科会
討論会、デモンストレーション

連絡先 崎玉県和光市白子2の8の5 菊美子 加藤和子

高群逸枝雑誌 III

(振替) 東京/65736 高群逸枝雑誌海城版印刷局 150円千五円
▼高群逸枝と柳田国男・村上信彦ノ、拾遺・招婿・高群逸枝ノ「日本婚姻史」とのであい・河野信子ノ桃源郷・高群清人ノ最後の人(三)・石牟礼道子ノにより・平塚らいてう・守屋東・松原久子・吉成寿美子・山田美津子 他。

労働者通信 NO.78

東京都大田区多摩川2の23の13 かり荘2の1 東人社
「抵抗なくして安全なし」。この古き労働者の安全闘争のスローガンは今も変わらない。安全衛生課や諸々の安全委員会が今や重要な職場支配のになり手となっている。さて再び我々は「抵抗なくして安全なし」を大にその一歩を。

▼殺人労働・資本の論理とおれ達の論理——石崎昭哲災害報告書ノ闘いの論理をとすまそう(1)ノ陳玉蘭強制送還ハ四周年ノ責任追究集会勝ちとられるノジンバブエ人民の闘争——南方アフリカ解放闘争

遊撃手 (3号)

東京都小金井市中町3の12の2直見荘仁号 長谷川修児(詩の平連)
毎週火曜日午後6時、新宿スカラ座(喫茶店)にて会合をもつています。情報交換、提案その他自由な語り。

▼戦争と静寂——ロバート・ブライノAへの手紙・尾形利喜夫ノ11月9日のことなどの記(一)・渋谷修三ノ遊撃手から・堀一郎・大矢勝造・田中義也ノバトナム反戦詩集オズ集ノレモンの旗・合評会報告・早川じゅんノ魯迅狂人日記へのメモ・田中義行 他。

岡山 救援通信 NO.19号

岡山市野田屋町2の3の18 岡山救援連絡センター 30円
手続きにしろ「分離」することが可能な「統一」公判とは一体何なのか。疎外された社会での裁判は公判でなく密室裁判・弾劾にしか

りえない。実は「公判」の効果は量刑による現実的空間収奪ではなく「被告」が人間性・時間性を奪い去られることにこそある。

▼日本原よりノ6/15闘争裁判被告よりノ森永告発徳島行動ノ「被告」への通信ノ裁判スリジュール 他。

ハコトマル10号

四日市市朝日町2の16 四日市公害と戦う市民の会 30円千四円
▼公害裁判・書証のやりとり続くノ公害裁判における鑑定ノ鑑定要旨ノ汚染する町・問題を先取りしようとする町ノマッチ一本せんそくのもと・加害者がふりまわす東大形式論理ノ反こうがい磯津寺小屋ノ四日市行動に参加して 他。

自由の使徒

宇都宮市石井町2の8 宇都宮大志峰寮 宇都宮ナキズム研究会 100円千円
▼オ三回無政府主義講座ノアナキズム入門・石井勤左衛門ノ現代のアナキズムの課題・信太裕ノ革命考・北条景樹ノロックと演劇とそれから・ルーションノ研究資料・アナキストの教育観 他。

自連特別号企画

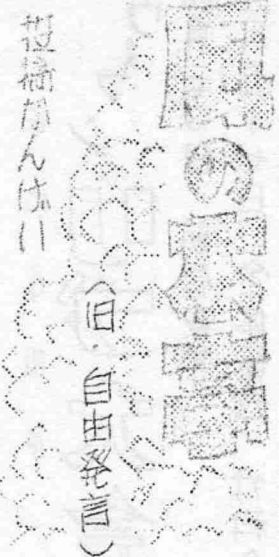
参加ミニコミがあまり多くないので、再度、参加をよびかけます。締切は一ヶ月延期、四月二十五日自連大阪必着。費項に一部変更あり。参加しやすくなりました。連絡下さい、詳細をお知らせします。

ミニコミの意味が、マスコミの交通を逆側させる志向にあるなら、買出し読み手ではなく乗っ取り手を生み出す交通にあるなら、読者が表現者へ自立する、結社ノの可能性にあるなら、自連社という結社の可能性は今あなたにかかっている。あなたにつくっているミニコミを送って下さい。

尚、予価100円。五月発売。申込み歓迎(詳しくは本紙35、36号参照)

お詫び 訂正

35号伝言板の「共同体の会」連絡先を誤記し御迷惑をおかけしました。今も時々集ってダバっているそうです。連絡は自連大阪経由で。
36号伝言板の「なんでも印刷所」住所変更京都府京都市東山区山科御陵大津畑36番田方



「サバイバル'72」始末記

○「解放戦線」フジオ

長髪族や反戦派に対する保守処分がかけられようとしているが、われわれサバイバル実行委員会へハレン学園、マリファナ解放戦線、P.E.A.K.他は、2月11日から四日間「サバイバル」フリーゼミを催した。この公開講座は、これからいかにして生き抜いていくか、いかにしてへたがされず、収入を得て文化戦線を推進していくか、を話し合うもの。

昨年暮、保守処分対策として仲間、義や所在を確認しておこうということになり、準備を始めた。どうせやるなら宿泊食事に無料にしよう、資金集めとPRに力がかかった。手はひめに12月31日から1月1日にかけて、鎌倉海岸で初もうで客をあてこんでの露店やロックコンサート。1月23日にはデモンストレーションを兼ね、新宿レオパレスマラソン大走。

2月10日、前夜祭としての有料ロック・コンサート。出演者は、頭脳警察、あがた森魚などの有名アーティストを含め全員ノーギャラ。彼らも入場料を払うという前代未聞のものとなった。朝からの雪で動員数が心配されたけれども、10万円以上の収益をあげることができた。

④ ④ ④
ようやく20万円をかき集めて11日を迎えた。会場は神奈川県厚木市の大葉山寮の一部で、皆、大正天皇の二男さんが住んでいたという由緒ある西洋館。

講座は11日「説明会」、自己紹介、12日「引のすすめ」、大地へのL.O.V.E.へ金坂健二「色彩感覚へ未来蒼生」、12日「一言問題へ平和とごもシタテル関係者」、13日「裸のギンズバークへ諏訪優」、14日「フィロム報告へささのり・おおえ」、15日「自然色へ野中恵明」の「保守処分テイイチン」コスプレオ自作のすすめ（フジオ）レコケイ。

パワー・ウィーマン・リスへ東郷便・クルール・岡うらなレ 14日「どうじレコフリー・コンサート」総括的討論

各講座の内容は、マスコミでも一部紹介されているので省略するが、6分程度のテープに収める計画が進行中であることを付記しておく。

会場内では、連日バカールや写真展が開かれた。だが意外にも、参加者個人の自由な意見発表（HOW・T.O.コーナー）はほとんどみられなかった。

④ ④ ④

終了後の反省会では、「多勢フリークが集まれば何かできる、という幻想をぶちこわした点で評価できる」と「自分自身で何かやらなければならぬ」「自己の生活をいかに変えていくかが最重要で、それが貫徹されていけば、このようなイベントを開催する必要はない」という当然すぎるようなことも言われた。

期間中も、とも問題になったのは食料。食料や設備の不足が目立った。共同体を目的として集まったわけではないし、日常生活と切り離された場での奇りない世帯で共同体になりえないのは勿論だが、宿泊食事を保証したからには、食事のことも、と真剣に考えておく必要があっただろう。

また、講座のないとき、一般参加者がヒマをもてあましていた感があった。スローガンをもたなければならなかった。これまでの反戦反文化運動との関連で、われわれ一人一人が空間に放り出されたとき何をやることかできるか、という問題を提起している。

寒さがきびしい中で、ふとんや暖房も少く、食事も満足できないという悪条件下、実行委員会が過労と風邪でバタバタ倒れてしまったフリーゼミではあった。外見上は何の成果もあげられなくても、失敗は消耗だ、ということになるのだろうが、各人が何かをつかみ、動くことに喜びを見出せば、それでいいのではないかと思う。

僕自身、電気系統と録音を担当し、四日間を体重が2キロも減ったけれども楽しかったし、多くのことを得たように思う。

付記 まとまりのない文になってしまったけれど、日本のフリークたちの運動の一部でも伝えられたらと思います。

小さなことの意味

好並隆司

岡山市中を定例的に歩いた所でうなんだというアホらしさは、他人から言われるまでもなく、一緒に歩いた連中みんな感じていた。それでも歩くというのにはなびだろう。個性ということもあるし、折角やっただからということもある。それまで説明できない寝たオリのようなものを感じた底に死んでいる。

毎日の示は、この一年間変化なく十名程度だった。反戦行動のこの小さな示も、市民の眼には何と写るかはよくわからない。それはよく自身、そんなにも小さい示を見ても分らないから。自分がやっていて自分にはわからないというのは、ぼくらがそのとき逆の視座に立つからだろう。おあげさという日常生活のリアルニクスの転回が定例示を實現できる。それが彼の正体ではないか。

ぼくらは普段ふつうの市民として存在し、秩序にはめこまれた日常生活を送る。そうした日常性は「権力」に耐えるという人間の本質性を麻痺させてつづける。定例示はそれをパッと覚醒させる。諸々の日常性の視線で「見られる極小数の示」はその名に似合わない「示威」の体を呈くたさないために同情され、軽侮され、アホらしくも目をむかわれているであろう。そうした「されること」こそ、これがいつまでも庶民のものであるために、こうした視線がぼくらにかりかかっている。力を示す大集団にはこうした視線はないだろう。また、「される」ということは、時に部落民のものであり、在日朝鮮人のものであり、沖縄人のものであったかも知れない。その深い暗みのなかに着地することが、この定例行動によって得られる気がする。

それは「される」はなしでなく、再度再々度するに逆転するエネルギーの源泉に自らを投企することには他ならない。このことはぼくらの戦いをよりほんものにしていくのではないか。へべ平連岡山分隊より

保守処分の思想

の克服

われわれは、単に現在の精神医療がひどいものだから、保守処分が

てまず「精神障害者」を抑圧管理し、全人民・革命的左翼への予防弾圧を意図するものだからというだけで、保守処分粉砕闘争を提起してきたのではない。保守処分粉砕を語るその内容の中に、歪曲された党派闘争を正場する契機はない。

保守処分とは「わけのわかろうないものは切る」という姿勢を根柢にするに思想の体制管理政策である。ここにいわゆる「内々バシ」の論理、その展開に共通するものはない。話し合いですべてがおさるというところではない。だが「全兵隊以後」の運動の中に保守処分思想があらはなかつたかという提起である。

いわば「各党派が他党派を保守処分している。あるいはいさうとされている」状況があるのではない。しかし「いさうとされて切れない」のが、わが党派の限界性である。などという居直りは承認し難い。それは国家の論理である。

また、「帝国主義の世の中で、手を汚さずに革命ができるか」という一般論で、この保守処分粉砕闘争を切ることができない。向われているのは、その革命の内容の豊かさの問題なのである。

(東京新聞三月六日号より)

トヨタマン節

(トヨタ自工の労働者の合作 弥三郎節の曲でドーゾ)

メーッアエー

独り豊田に來たものの
遠い故郷を想い出す

アリヤー トヨタマン(メーッアエー)

メーッアエー

ニッニツとペケケ食品づくり
班長組長にどやされる

メーッアエー

朝昼晩の三食も
豚もくはねもものばかり

メーッアエー

嫁ッ子はるる來にけれど
泊まる部屋なくカーホテル

メーッアエー

いつまでも無災害
首ッ子切れても無災害

メーッアエー

娘見たさに町に叫びや
娘少ない町だとさ

メーッアエー

泣く子をだます力力の声

これが昼寝というものの
メーッアエー
やっと建ったマイホーム
オレの体が質屋さ
メーッアエー
くるまくるまにくるまの町だア
乗ったくるまは火のくるま
メーッアエー
トドの詰まりのトヨタマン
くるま残して後家づくり
(月刊市政研八九号より)

編集集室

※ 連合赤軍の事件に際して、やりきれない、つらい、おもいを抱かないものはないだろう。そして口をひらけば、何らかの弁解、去訳けじみたものとなることで、何となくいっそりと身をひいて口をつぐんでい、という状況が多くの周辺にある。それゆえにこそ、いまみんな一せいに声をあげて語らねばならない。つらい、重い、というのが多分にこれからの運動がやりにくくなること、それへの顧慮としてあることに気付けば、ひととはひとのこと、運動は運動のこととして、自分はどうだと、自ら自身のおもいを卒直に、かくすことなく語るべきではないか。

もう、そろそろへ自連も解刊のときがきたのではないか。その理由、①もう三年も出してる ②状況がかわっているのに紙面はあまりかわっていない ③時代とズレてるんじゃないか ④発行エネルギーがほとんどなくなってきた(編集社員の共同作業もうまくいってない) ⑤読者(社員)も、自連をそれほど必要としていない気がする。

というふうなことで、四〇号でやめることにしたらどうだろうか。(小川 信)

☆ 自連を解体することに僕は反対しない。僕自身としては、自連がなくなることに一種の期待すら抱いている。

自連に関わる前の僕はといえば、朝日ジャーナルのお好きな不真面目浪人であり、実際運動というドブ板を踏み抜くべきかどうか悩む純情な未成年であった。そして最初のドブ板が自連であり、早や二年以上の歳月がすぎた。

下条がおるといふ男の名が自連紙上からいつしか消えた。自連との関わり方を変えるためであり、彼にと

っての自連が理念上大きく変質するからでもあった。しかし一たんそうなった時、自連は負担以外の何ものでもなく、現実感として必要性は感じなくなってしまう。そして今年の一月、編集会議に於て、(1)自連を必要としない (2)自連をやり切るつもりはない (3)ことを一応言上げておいた。そのことは契機さえあれば、いつでも身を引くことでもあった。僕の生活が四月から大きく変わることを契機に、自連から身を引くことを決めた。一つの区切りとして40号で完全に身を引く。自連という存在が僕の行動範囲から消える時、おそらく何かが見ええると思う。殆んど自連の関わりにおいて検証をサボってきたけれども、関わりを断つことで、今までの自分自身の流れ(生活)の検証が浮び上ってくるだろう。

連合赤軍の一連行動に対して、小川信はいっせいに語れという。自連との関わりと、僕にとっての釜ヶ崎は「ああやってるんか」という程度の感慨しか与えなかった。要するにアホらしかったのである。板東の父親の自殺という、きわめて強固な市民社会の呪縛の中での兵士達の行動はコックイだった。しかし、コックイだと一笑に付すことは僕自身には恐らくゆるせないことだろうし、そういう意味において、実にやり切れない思いだった。下条がおるが産声をあげてこの二年というものの、両親との問題には何一つ明解な答を見出していないのである。『肅清』という問題は何も党派だけの問題ではない。『家』にあっては、子供は親にとって『肅清』の対象ではない。その『肅清』を拒否し、家をおんでに多くの僕にとって、他人を『真に認める』ということが問われているのだらう。(旧名・下条がおる)

☆ 連合赤軍——SM君からのアングに「赤軍の如きマルキストは、国家権力によらず我々の手で解体していかなければならぬじゃないか」とある。多くの返事はこうだった。『ぼくは如何なる場合にも国家権力の側には立ちたくない。彼らが国家権力と闘っている限り、彼らにとってぼくが敵であろうとも、ぼくにとってぼくは広い意味で味方だ、と。ぼくは戦略的にも心理的にも生理的にも彼らのシンパでない。だから大量肅清も、当然の帰結として受け止めた。にだ人命という(女貞下段へ)』



※ 昨日まで某大学受験の為みちのくまで行って来て、寝過ごして、今日は一時に来る予定が五時になってしまった。しかし自連を一度は訪ねておきたかったから、誰かまだ居るか不安な気持ちでやって来ましに。ここ(Aアシト)はきれいじゃないけれど、予想よりはいいふんど片づいていて、けっこうじゃないですか。これから何を書くか、今度来るまでに考えておくので、今日はこれで失礼——。



※ 連合赤軍私刑事件に關して、あの一連の総括が、彼らのいう「革命」の必然であつても偶然であつても、僕にとつてその両者には何の差異をも見いだせない。まったくの革命のための革命でしかない。

※ 書くといいことは、書くこと……意識があることを前提(?)にしているようだ。意識とは……嬉しい、悲しい、歌いたい、飲みたいたい。書く時には、もう一つ前提がある。それは知識だ。まず言葉、一般常識、その他諸々の先入観それらのものと、我が肉体とその内部に秘めたる精神のどうすることも出来ない自然的な気持(意欲・フィリント)と、それが言葉を媒介にして書かせることになる。……別段何を書くというわけじゃない、一つの向に、書くことがないというところを書いてしまった。(ヘヘッサン)

※ 自連とのつき合いも、もう二年以上にもなつてしまつた。その向、主体的に編集に關わるでもなく、連日の様にアシトに顔を出し、古縁を氣どつていたのみ、自連発行が三斗にもなつた今、自連のあり方が問題になつてゐる以上に、僕自身にとつて、小市民的な生活を送る僕と自連に關つてゐる僕とのギャップを埋めなければならぬ。

※ 僕自身の胸ありの無責任さを、インペイしようとして、自連なんか忘れて、僕は自連には關わらないんだ。と言いつつ、アシトへ行つて仕事を手伝ふのは気が済まない。この僕は何かのか。(氣田隆一)

※ 物化されてゐる自分を覚えるとき、それは自分に与えられた最大の侮辱を覚える時。一年もつき合えば大體の人の全貌がわかるもの。(もう三年にもなる。今までは被害意識

のみならば、今度は思いきつて立場をかえて、加害者になつてみるのでもいいじゃない。……關係Vを叫びながら、嫌味もよばない。無關係Vに墮してゐたのなら、その落ちきつた、無關係Vから歩み出すのもいいじゃない。しかしあくまで別々に。出会うものなら出会うさ、いつか。

合意を創り出すために技術を働かせ自己抑制する必要なんてあるのかな、結社じゃあるまいし。……と男の關係なんて、理性とは無縁な、やさしさの關係だもんね。(司)

【前頁最終行ヨリ】そのことだけが大きなワダカマリとなつてゐる。山崎博昭の死は構想論者ゆつたばかりを反戦高協の隊列に放り込んだ。が……。……総括Vの場に自分がいたら手を下したにちがいない。……關係も連合もあつたものではない。……それを承知で、ばくはまず技術の修得に全力をあげる。何の技術かはナシショ、ゴクヒ。

集團の構造……虫の好かん奴、というのが誰しもある。好き嫌いは勿論デオロギーの如何とは無關係だ。共通の課題に取組み、一つのグループを構成してゐる人間の間にもある。明確な志向性・目的をもっていても集團が崩壊するのは、大抵の場合、人間關係の些細な縫れからだ。つまり、一つの運動を進めるとか共同で生活するとかいうとき、それも取組む以前はともかくとりかかつてからは、目的やデオロギーよりも一見些細な生活技術・事務・體質・発想や思考のセンスなどが大きな問題となる。好き嫌いのなものや克服すべきだが、相手も自分も生身の人間なのだ。

自連のこと——自連の廃刊・解体の問題に關してはここでは触れない。リブすることに反対なのではない。むしろ積極的にリブそうと思う。それは案外難しいことなのかも知れない。いま自連の事務は乱れてゐる。多くの読者に迷惑をかけてゐると思う。何かあれば連絡して下さい。この号の発送がすめば、一断懸命に事務を片付けます。名簿用アンケもさっしりやります。それが、自連廃刊という小川信の提言に對するべく流の答です。

※ ひとつのまにかえそ年になつてしまふ。あたりに見回しても同世代の友人がほとんどいないの淋しく感じるようになってきた。同世代の友人たちのほとんどは、七〇年戦争(ほんとは六九年十一月までだった)が最後になつてしまつてしまつた。彼らをすする氣にはならない。むしろ彼らを呑み込んでしまつた。そして今、俺たちをも呑み込むとしてゐる。市民社会Vが恐ろしい。市民社会を拒否し続けに少ない友人が、自殺しかかたり、テロを憧憬してゐるのを聞いて、「思想的痴呆症」と年若い知人から批判されながら生き恥じをさらしてゐる自分の日常に自信がもてなくなつてくる。

※ 所詮、俺たちの運動というのは市民社会という代物の排他行為でしかなかったのではないかと思つてならない。市民社会は、多数の青年の生命と情熱を奪つた連合赤軍事件の全てをも排他してしまつたのだらうか。方法は違つても、彼らの「秒読み」を己のものに感じてゐる俺は……

※ ひとつ、ここで、自分の生き方に節を作つてみようと思つた。生きざまを変えることによって、スズメの底なしの市民社会に重鎧をたらしめてみようと思つた。できれば「くらし」がそのまゝ運動であるような生活求めて備に居を移すことにした。市民社会を前にした時、結局は個人でしかないことを重々承知してゐながら、なあかつ「秒読み」の重みを共有したいと思ひ、それを「共同体」と呼んでみた。

※ 生来、人恋しがり屋の俺だから山中の百姓ぐらしは向いてないと思つた。あえて意地を張つてやつてみるつもりだ。未知の友人からの手紙が欲しい。できれば直接俺にやつてきてもらつて話し合いたい。そして新しく自連と自連の友人たちとの關係を作つていきたい。備の住所は八咫山県阿蘇郡神郷町油野備北内備北共同体V山の中も、やっぱり市民社会の一部だらうなあ。(尾関 弘)